

「予防教育」の実際と可能性

山崎 勝之

鳴門教育大学予防教育科学センター所長

第8回 —— 生命線としての科学的評価

過去3回で予防教育の授業の実際を紹介を終え、理論から実践までをカバーした。次のターゲットは教育効果評価の方法と結果である。

教育が良いかどうかの決め手は、教師の評価でも子どもの感想でもなく、科学的な評価になる。科学としての予防教育の真骨頂とも言える側面である。

1 そもそも科学的評価とは？

ある教育が本当に効果があるのかどうかを決める科学的な評価は、日本で行われた試しはない。と聞いて、驚かれる向きも多いだろう。一体、科学的評価とは何なんだ？と身乗り出すことだろう。それは、一言で言えば、疫学の領域でよく行われている「無作為化比較試験」という手続きになる。

話が少し専門的になるが、教育が対象とする集団（日本の小学生など）の中から、その集団特性を歪みなく反映できるように無作為にサンプル集団を抽出し、教育実施群と統

制群（多くの場合、後に教育を受ける）を設定する。そして、少なくとも教育前と教育後に教育目標の達成度を測定する方法を適用し、両群の測定結果を比較するという方法だ。

細部はまだまだ複雑で、測定方法自体も、信頼性が高く、確実に測定対象をとらえる必要があるし、他にもいろいろクリアすべきハードルがある。予防教育の先進国アメリカでは、この手の科学的評価が教育プログラムで多数実施されているのは垂涎的である。

2 予防教育の評価方法の出来

映え

さて、この無作為化比較試験は難題である。それを実施する人的、経費的負担もばかにならない。そこで、予防教育は教育の開発と平行して、何段階かのステップを踏んでその理想デザインに到達しようとしている。今はその2段階目で、最終段階を目前に控えている。

現段階の評価デザインは2つあ

る。デザインAは、教育前の2時点間の変化と教育前後の変化を比較するもの。デザインBは、教育群と統制群を学校の多数のクラスで構成し、両群を比較するものである（図1）。理想のデザインからすれば欠点があるが、これでも実施の労力は大きく、教育効果の推定精度は格段に上がっている。

科学的評価の他には、印象評価を行い、事例報告も集めているが、これらはあくまでも補助的な資料とま

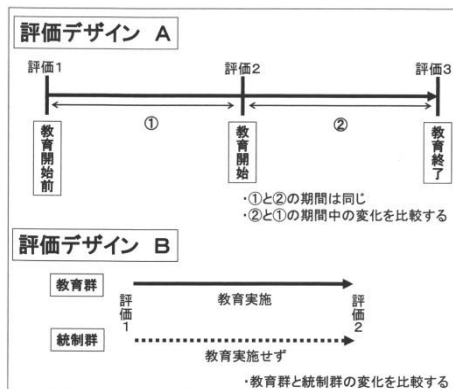


図1. 予防教育における現段階の効果評価デザイン

3 直接的目標をどう測るのか

予防教育では教育目標がエビデンスをもって階層的に構成される（本誌6月号参照）。この目標が達成されたかどうか教育の効果評価では最も大切になる。

目標が階層的に構成されているだけに、すべての目標を合わせると多くなるので、どこかの目標に焦点を当てることになる。そこで階層の2層目にある目標（中位目標と呼ぶ）が抽象的すぎず、また全体をとらえるには良い位置にあるということ、この中位目標が達成されたかどうかを質問紙で調べることにした。

この中位目標が達成されるということはその上層の目標（上位目標）が達成されることになる（例示は、表1参照）。質問紙では中位目標ごとに得点が算出され、その合計得点が上位目標の達成度を示している。

もちろん、作成された質問紙は、心理学で言うところの信頼性と妥当性が備わり、測定法としては精度の高

表1. 自己信頼心（自信）の育成における上位と中位の目標

上位目標	
自分自身をかけがえのない存在として認めることができ、自分が興味・関心のあることへ前向きに取り組めるようになる。	
中位目標	
I	自分と他の人の大切さがわかる。
II	自分が本当にやりたいことがわかる。
III	自分が本当にやりたいことに向かって進むことができる。
IV	自分と他の人が、本当にやりたいことを実現しようとしている歩みを尊重することができる。

以下、下位目標、操作目標へと続く。

ものになっていく。

予防教育の授業は種類が多いので網羅して紹介することはできないが、ベース総合教育の「自己信頼心（自信）の育成」の小学校3年生で結果の一部を例示する。なお、すべての教育で、この直接的目標がほぼ達成されていることは強調しておきたい。

4 直接的目標の達成状況

図2は、評価デザインAの結果である。縦軸は、4つの中位目標得点の合計点、横軸は教育前約1か月、

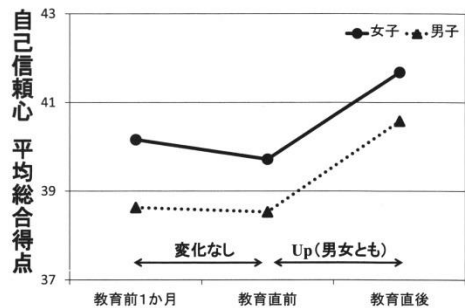


図2. 評価デザインAにおける教育効果（直接的目標）

教育直前、教育直後の評価時点を示している。結果は男女ごとで、6つの小学校、全16クラスの平均値である。このようなデータは図の見た目では判断しない。平均値の他にデータのばらつきが重要なので、それらを確率的に処理できる統計分析を用いることになる。簡単に言えばその統計は、結論の誤りが5%の確率内に収まるとき、その結論は統計的に意味がある（有意）と表現する。

この統計の結果でいうと、図2では、教育前の変化はないが教育を実施すると自己信頼心が有意に高まっ

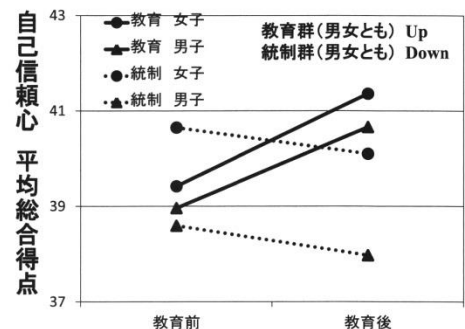


図3. 評価デザインBにおける教育効果（直接的目標）

ていた。つまり、男女ともに同程度に明確な教育効果が認められた。全体的な男女差もあるが、教育効果とは関係がないので言及しない。

図3は、評価デザインBの結果である。今度は、教育前と教育後の評価時点で、教育群と統制群、男女別に自己信頼心の総合評価得点の平均値が示されている。各群は3学校の8クラスからなり、無作為に群配置がなされている。統計分析の結果は、男女同様に教育校で得点が上昇し、反対に統制校では得点が低下している。かなりクリアな教育効果と

言える。統制校はこの教育を実施しなかったが、このように自信が低下傾向にあるのはよく見られる現象であり、現在の学校教育の問題の一端を示している。

5 波及効果はどうか

予防教育では現在、直接的目標の他に、波及効果を多様な評価尺度を用いて調べている。同様に、「自己信頼心(自信)の育成」の3年生でQ-U質問紙の結果を取り上げ、いくつか紹介しよう。Q-Uと言えば、日本の学校で最もよく利用されている質問紙であり、学校でも馴染みがあるというところで使用した。

その結果、学校生活への意欲が高まり、学級への満足度も高まること示された。それに加えて学習意欲も高まり、評価デザインAでその結果を示した(図4)。男女ともに学習意欲が教育により高まること示され、予防教育が健康と適応のみならず学力面にも好影響を及ぼすことが示唆されている。ここでも教育

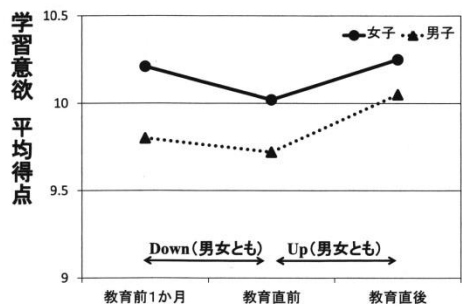


図4. 評価デザインAにおける教育効果 (学習意欲)

6 無意識の変化を垣間見よう

前の1か月間に学習意欲が男女とも有意に落ちている。日本の学校は危機的状况にあり、予防教育の導入がどの学校にも望まれる所以である。

これまでの評価の紹介は、自分が意識していることへの回答で、心理学では最もよく使用されている質問紙法による。しかし、これには自分で気づいていない特徴は回答できないし、また防衛性から回答を好まない方向に歪めることも起こるだろう。また、無意識領域の情動の働き

を強調する予防教育では、これだけでは不十分な評価と言える。そこで昨年度より、本人が意識していない特徴をとらえようということで、2つの方法を導入した。

1つは、インプリシット (implicit) 感情の測定、もう1つは、作文の分析である。一般に自分が気づいている感情はエクスプリシット (explicit) 感情と呼ばれ、インプリシット感情は意識前にある感情 (情動) である。それを意味のない線図を見せて、その線図がどのような気持ちを表しているように見えるか判断してもらい、その判断結果に自然と自分の感情が投影されることを狙う方法である (図5)。作文法では、短

時間自分で自分や友だちについて人に紹介してもらう。字数制限で書かれた作文内容を、自己や他者への信頼など様々な観点で自動的に得点化した。

その結果、予防教育を実施するとインプリシット正 (ポジティブ) 感情が増大した。正感情が増大したということは健康や適応上良好な状態を示し、教育効果が本人の気づかない側面からとらえられている。作文でも、とりわけ他者信頼などで記述内容が高まり、これも他者との良好な対人関係を示し、予防教育で目指す効果が達成されたと言える。

他にも事例なら山とあり、保健室登校の子どもが教室に戻った、家庭で明るくなった、他の授業で発表が多くなった、それに教師自身が授業が上手くなったなど、多数の報告が寄せられている。が、科学的評価という点では軽くとらえておきたい。

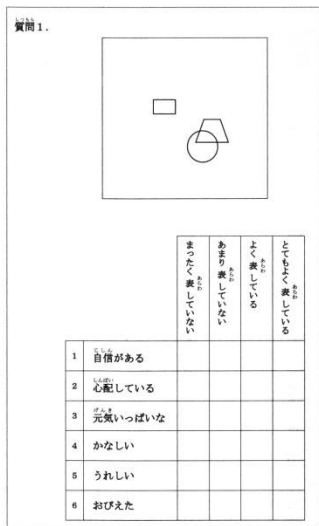


図5. インプリシット感情測定法例